

日本語上級学習者が感じる「読み」の困難点ー中国語話者の場合ー  
Reading Comprehension Difficulties in Advanced Learners: The Case of Chinese-speaking Students

水戸淳子, 香港大学  
Atsuko Mito, The University of Hong Kong

## 1. はじめに

筆者は香港の大学において初級後半から上級にかけていくつかのコースを担当しているが、本稿はアクション・リサーチ的に、「上級学習者の『読み』の困難点」について、文献調査とともに授業内で行った簡単な調査データをまとめたものである。具体的には、学習者が自分の「読み」における困難点をどのように自覚しているのかについて回答してもらったデータとともに、関連する文献で指摘されている内容や、実際の教授場面で筆者が観察・経験した事例を具体的に紹介し、また、それらを踏まえた上で授業活動の際に注意すべき点について考察を加えたものである。データは、あくまで授業活動の中で学習者に書いてもらったタスク・シートへの書き込みをまとめたものであり、専門的にデザインされて行われた調査への回答ではないことを予め断っておく。

今回、本稿で「上級学習者」としているのは、本大学でゼロレベルから学習を始めて全部で8レベルある中の最後の2レベルを履修している学習者を指しており、その中には半年または一年の日本留学から戻ってきた学習者もあり、年度によって違いはあるが、半数には満たない数の学習者がN1を既に取得しているぐらいのレベルである。

## 2. 上級学習者の「読み」の研究

### 2.1 なぜ「中国語話者の場合」なのか

上級学習者の「読み」の研究というのは、管見の限りでは中国語話者の場合とそうではない場合に分けられていることが多く、また「漢字系学習者」と「非漢字系学習者」という分け方がされている場合もある。

上級日本語学習者の読み誤りについて詳細な調査を行った野田・花田・藤原(2017)では、中国語を母語とする学習者は漢字に頼って読む傾向が強く、日本語を学習する前は漢字を知らなかった学習者とは、論文の読み方やどこでどのように読み誤るかも違うことが予備調査から推測できたと述べられている。また野田・桑原(2022)にも、日本語の読解では日本語の漢字ではなく中国語の漢字であっても漢字の意味を知っている人は、日本語を学習していなくても読んで理解できる部分があり、漢字で書かれる語彙については中国語と違うものだけを学習すればよく、それ以外のものは中国語の意味から推測すればよいと記述されており、中国語話者は漢字からトップダウンで推測する力を強く働かせて読む傾向が強いことが示唆されている。

漢字から推測する力を働かせる読み方は、読解の際、非漢字系学習者の場合と比べて強力なアドバンテージとして効力を発揮すると思われるが、上記二つの文

献の中でも言及されているように、漢字に頼った読みは万能ではなく、誤読が起きる場合がある。

筆者は授業活動の中で「情報検索」のための読み練習と、「主張理解」のための読み練習を続けて行ったことがある。「情報検索」のための読みでは『中・上級者のための速読の日本語』の 42～43 ページにある実際の百科事典の目次を利用したタスクを使用し、読みたい内容についての情報が何ページにあるかといったスキニングのタスクを集中的に行ってもらった。キーワードがカタカナ語の場合があるものの、やはり漢字語彙がキーワードとなる場合が多いため、学習者は非常に速くこの検索タスクを行い、正答率も非常に高かった。それに対して、そのすぐ後に行った「主張理解」のための読み練習では『新完全マスター読解日本語能力試験 N1』の 38 ページを使用し、文章全体を通してその作者が主張したいことを選択肢から選ぶという設問に答えてもらったが、誤答がちらほら見られ、作者の最も伝えたいメッセージを受け取り損ねている学習者が予想外に多かったという経験をしたことがある。

## 2.2 研究の少なさ・難しさ

管見の限りでは上級者の「読み」のプロセスに関する研究というのはあまり多くない。ましてや誤読の原因を特定するという研究は非常に少ない。その理由について野田・花田・藤原（2017）は「実際にどこでどのように読み誤るかという詳細な研究はこれまでほとんど行われてこなかった。『日本の大学院に留学している上級学習者が自分の専門分野の論文を読むときに、読み誤ることはほとんどない』と思われていたからだろう」（p.16）と述べている。

筆者はそれに加えて「読み」という、いわばブラックボックスである頭の中の認知過程を明らかにするという研究の性質上の難しさも研究の少なさにつながっていると考えている。野田・花田・藤原（2017）で行われた調査では、調査に使用する言語は日本語ではなく学習者の母語であり、理解確認は読みながら同時に語ってもらう形式で行われ、また調査者による質問も全てを読み終わってからではなく、その都度、質問し、答えてもらうという形式を採用するなど、学習者がどこでどのように読み誤るかを正確に捉えるために綿密にデザインされた手法が用いられている。

## 3. 上級学習者が感じている「読み」の困難点

### 3.1 データについて

筆者が担当する上級コースの授業はトピックベースで行われ、毎学期いくつかのトピックに基づいて授業が展開されている。最初のトピックは「『読み』について考える」であり、コースの初回に質問紙に答えるというタスクをしてもらい、自分の「読み」の生活について振り返ってもらうことをしている。具体的には、何語でどんなものを読んできているか、現在の「読み」の生活の中でどの言語をどんな活動でどのくらい使っているのかなどの質問に答えてもらっている。その一連の質問の流れの中で、学習言語である日本語での「読み」について振り返っ

てもらい、「日本語で『読む』とき、今、難しいと感じている点は何？特に注意していることは？」という質問をしている。今回まとめたのは過去 5 年分、約 90 名の学習者が回答したデータである。自由記述で書いてもらっているが、「長い文」「複雑な文」というように短い一言だけを書く学習者もいれば、具体的かつ詳細に書いている学習者もいた。基本的に授業中に書いてもらっていたが、コースの初日に台風が直撃することが多くあり、休校になって家での宿題として書いてもらった年度も複数回あり、そういった年は量や記述内容が豊かになる傾向があるなど、ばらつきがみられるデータである。回答内容は毎年まとめ、その後の授業においてクラスで共有するなどして活用している。

今回紹介するデータは、現段階では非常にざっくりとしたまとめ方しかしておらず、コーディングをしたり、テキストマイニングをかけたりするなどの分析は施していない。

筆者は、困難点についての学習者の記述を内容別に①語彙、②表現、③文の構造、④文章全体に関して、⑤背景的知識の五項目に分類した。以下の節において、項目ごとの学習者の回答とともに、適宜、筆者が実際の教授場面で観察・経験した事例の紹介や、授業活動において注意すべき事について筆者が考察した内容を付け加えて紹介していく。

### 3.2 困難点①: 語彙

語彙についての記述は、五項目の中で二番目に多かった。以下の項でさらに詳しく内容ごとに見ていく。

#### 3.2.1 語彙全般

「単語がわからない」という大雑把な内容の記述が多く、但し書きとして「漢字語彙は大体の意味は分かるが…」と付け加える学習者もいた。これに対して注意していること、つまり学習者個人がストラテジーとして取っていると書いていたのは「漢字がない語彙、接続語、副詞、専門用語に注意している」といった記述であった。このストラテジーは非常に興味深い。なぜなら、漢字で表記されない接続語や副詞が、中国語話者である上級学習者の誤読の一因になっていることが野田・花田・藤原（2017）でも指摘されているからである。例えば、副詞「かつ」を「かつて」と読み間違えてしまった例や、「またわかり易く体系化」という接続語「また」の後に読点がない記述から、「またわかり」で一語だと認識してしまったという例などが挙げられている。一般的に接続語「また」の後には読点が入ると教える場合も多いと思われるが、実際には必ずしも読点が入るわけではなく、このように接続語や副詞がその後の言葉と一緒にになり、ひらがなの羅列になっているような場合、どこからどこまでがどの言葉なのかしっかり読み分けるように注意を促すことは重要であると言えるだろう。

#### 3.2.2 漢字語彙

続いて、漢字語彙についての記述を見ていく。まず「読めない、読み方が難しい、複数の読み方がある」といった読み方に関するものが多かった。次に「中国

語と意味が違う」という記述も多くあり、例として「顔色（中国語ではただの『色』という意味）」、「大変（中国語では『大きな変化』といった意味）」、「大意（中国語では『うっかりしている』という意味）」といった言葉が挙げられていた。これらに対して注意していることとして「すぐ調べるようにしている」と記述している学習者が見られた。

次に、漢字語彙の表記についての記述を見ていく。「漢字語彙がひらがなで書いてある」ことを指摘している学習者があり、その結果、「前後のかなとの区切り・どこからどこまでが一つの単語かわからない」ことが困難点として挙げられていた。これに対して注意していることとして「助詞に気を付けるようにしている」という記述が見られた。

この漢字語彙のひらがな表記に関連して、筆者が中級での授業において経験している事例を紹介したい。ある教材（『初級日本語文法総まとめポイント 20』p.15）の中に「おばあさんは、川へ洗たくに行きました」という文があり、その「洗たく」を「あらたく」と間違えて音読する学習者が例年、後を絶たないのである。一般の子供向けに書かれている文章などでも既習漢字だけ漢字を使い、それ以外はひらがなで書かれることがあったり、語彙の一部の漢字が表外字（2136字ある常用漢字以外の漢字）である場合、一部だけひらがな書き（交ぜ書き）されることがあったりする（例:「破たん」「補てん」「強じん」「研さん」「ねつ造」「まん延」「ひっ迫」「う回」「ら致」）のであるが、筆者自身の教授経験を振り返ってみても、あまりこういったことを学習者に伝えてきているとは言えない。もともと母語で漢字語彙を熟知している学習者の場合、日本語の文章の中ではこのような書かれ方をされる場合があることを意識しておかないと、「洗たく」を「あらたく」と読んでしまうような誤読や読みにくさにつながるものが容易に想像できる。こういった場合に対して注意していることとして「助詞に気を付けるようにしている」という学習者の記述があったが、この戦略は有効であり、非常に興味深いポイントだと言える。今後の授業活動においては、こういう漢字語彙の一部がひらがなで書かれる可能性や、そのような場合の見分け方として助詞に気を付けるということの大切さを積極的に学習者に伝えていきたいと考えている。

### 3.2.3 漢字語彙以外

漢字語彙以外として「カタカナ語、外来語」「オノマトペ」「方言の言葉」が挙げられていた。この中の「カタカナ語、外来語」についてであるが、これが中国語話者である上級学習者の誤読の要因になっていることが野田・花田・藤原（2017）でも指摘されている。例を挙げると、「ストレージ」を「ストラテジー」と読み間違えたり、「2.5 トントラック」の「トン」が分からなかったためか「トントラック」を一語だと思ってしまったりした例などが挙げられている。

さらに漢字語彙以外のものとして、「慣用表現」「ことわざ」「熟語」「古い言葉」「縮約語」「略語」なども挙げられており、具体例として「赤の他人」「渡りに船」という言葉が漫画やドラマの字幕に出ていたという記述もあった。

### 3.3 困難点②:表現

何人かが挙げていたのは「言えないわけではない」などの二重否定文である。筆者は上級コースの中で論説文を取り上げる機会もあるが、その中には主張を強調する際に「～に他ならない」「～以外にない」といった、二重否定的な表現が多く出てきているが、こういった表現に読み慣れることも大切なポイントであることがうかがえる。

また「形式名詞（ところ／もの／こと）がある文」と書いた学習者もいたが、この点についても野田・花田・藤原（2017）には指摘があり、「中国語を母語とする学習者は、漢字で書かれている部分を中心に読む傾向がある。そのため、ひらがなで書かれている「～としている」や「～こととする」のようなモダリティ的表現は、重要な部分だとは考えずに、読み飛ばすことがある」（p.21）とされ、実際の誤読例として、規定を表す「～こととする」「～ものとする」や、引用を表す「～とのことで」などを不適切に理解する例が見られたという。そこに書かれていることが「引用」なのか「規定」なのかは非常に大切な読み取りであり、わずか五文字程度のひらがなの羅列で表記されるこれらの表現には、特に注意を払って読むことを強調しておくといえると思われる。

その他には「改まった表現」「待遇表現」「婉曲的な表現」「曖昧な表現」「複数の意味がある表現」といった記述があった。

### 3.4 困難点③:文の構造

文の構造についての記述が五項目の中で一番多かった。「長い文」「複雑な文」「中国語／英語と違う構造」といった大雑把な書き方が多かったが、中にはより具体的な記述もあった。これらの内容は、文の構造として関連し合うものであるため、この節では、以下のような項立てでまとめて紹介していく。まずは次の項で学習者が書いた内容をまとめて紹介する。そしてその後の項において、それらと関連があると思われる、実際に教授場面で観察・経験した事例なども含め、今後授業活動において注意すべきことについて筆者が考察した内容のポイントごとにまとめて紹介していく。

#### 3.4.1 困難点についての具体的な記述

大雑把な書き方として目立って多かったのは「長い文」「複雑な文」というものであった。また「中国語／英語と違う」という書き方のものもあった。

より具体的な記述としては「文の中の区切りが分からない、点が少ない」「どの言葉がどの言葉を説明しているのか分からない、修飾語と被修飾語が分からない」「受け身・使役の対象」「主語と述語のつながり」「主節・従属節」「長い名詞修飾節」「省略されている部分が分からない、主題・主語・代名詞の省略」というものがあった。また注意していることとしては「文が長いと、後ろの内容を読んでいると前の内容を忘れてしまうので、主語をハイライトして見失わないようにしている」「接続語や文末、省略部分、助詞に気を付けて読んでいる」といったものがあった。

### 3.4.2 関連事例や今後の注意点①:簡単なものから確実に

上記「3.4.1」で書かれていることに対して、まず授業活動で大切だと思われるのは、簡単・局所的なものから、そして初級の段階から、確実に理解を押さえていくことだと筆者は考えている。例えば、名詞修飾節は、構造的な複雑さを文にもたらす項目の一つであるが、多くの教科書では初級で扱われており、『みんなの日本語初級』では全部で 50 課あるうちの前半部分である 22 課に登場し、「これはミラーさんが作ったケーキです」という文などで、名詞修飾節内では「は」ではなく「が」を使うという学習内容も提示されている。

野田・花田・藤原（2017）でも、上級学習者の読み誤りの要因の一つとして、文の中でどこがどこを修飾しているかを読み誤る様々なケースが指摘されている。

日本語の長文の複雑さの特徴としてよく挙げられる、入れ子（埋め込み）構造を読み解く最初の一步として、名詞修飾節の読み取りが大切な事は言うまでもないであろう。まずは初級で出てくるような簡単な名詞修飾節を読み取れるようにし、文の中でその部分を浮き上がらせて読むことができるようになることが、その先、より複雑で長い文章を読み解くのにまずは不可欠な基本的なスキルであると言っていいたいだろう。

筆者は上級クラスでこの重要性を痛感したことがある。それは「詩歌の世界」というトピックで授業活動をしている中で、より文章を深く味わうために、隠喩や含意なども含めた様々な表現技法を紹介し、その後で学習者が自分の好きな日本語の詩歌をクラスメートに説明するという活動をしていた時のことである。ある学習者が「あれは空がまだ青い夏のこと」（あいみょん、2018）という句を見て「青い夏」という言葉が先に目に入ってしまったらしく、「『青い夏』という言葉は『青春』という言葉にちなんでいるのではないか」と推測を働かせたのであるが、この句で言っているのは「空がまだ青い（名詞修飾節）夏」ということであり、「青い」のは「空」で、「夏」を形容しているわけではない。文の中で、名詞修飾が一つのピースとして浮かび上がって見えてこない、文の意味を読み損なってしまいかねない。

一般的に初級で文型を学ぶときに提示される文では、焦点化される項目は一つである。たとえば『みんなの日本語初級』16 課では「時間の前後」を表す動詞の「て形」文型（「朝、ジョギングをして、シャワーを浴びて、会社へ行きます」）を習い、23 課では「恒常的な条件」を表す「～と、……」の文型（「このボタンを押すと、お釣りが出ます」）を習う。まずは、一つの文型ごとに言葉と言葉の関係構造と意味を理解することがやはり非常に大切であることを強調したいと思う。なぜなら、文が長く複雑化していくと、言葉の関係構造が多くなり、また係り受ける言葉が位置的に離れることも多くなることで、より一層わかりにくくなるからである。それらの構造を読み取っていく上でも、まずは初級の文型練習で一つ一つの言葉と言葉の関係性や係り受けの構造を簡単なものから確実に理解していく必要がある。

「読み」とは少し離れるかもしれないが、この「一つ一つを確実に」理解していく大切さについて筆者が実感している経験を紹介したい。初級後半の授業で道案内をするタスクを学習者にしてもらっているが、二つの連続した動作の後で、

どこに何があるかを説明する場合に使用する「A て、B と、C 。」という文型（例：「あそこを渡って、まっすぐ行くと、右にあります」『みんなの日本語 23 課』練習 C-3）に戸惑う学習者が毎年多く、文型「A て、B 」（時間の前後）と、文型「B と、C 」（恒常的な条件）の違いを把握せず、この二つの使い方を混同して組み合わせて使ってしまう場合が非常に多くみられる。例えば「少し歩いて、橋を渡って、左にあります」や「少し歩いて、橋を渡ると、右に曲がります」などといった文が多く作られがちである。『みんなの日本語』16 課で時間の前後を表す「～て」を習い、その使い方が 23 課に再登場しているのであるが、16 課の内容をしっかりと理解していないと、こういった組み合わせの文型は、理解や使用が難しいものになってしまう。日本語の長文や複雑な文というのは、こういった言葉のつながり、係り受けの組み合わせが多数配置され、かつ係り受ける言葉が位置的に離れている場合もあるため、まずは一つ一つ、初級のうちから理解を固めておくことが上級で長文や複雑な文を読み解くための一歩であることはやはり間違いないだろう。

#### 3.4.3 関連事例や今後の注意点②：かき混ぜ文の提示&助詞の大切さ

筆者は中級の授業で、主節・従属節内での「は」「が」の使い分けを説明する際、「は」は節を越えて使う事ができるのに対して「が」は節内ですぐ後の述語と結びつくという話をしており、例文として「日本は（日本人が思っているほど）狭い国ではない」（『留学生のためのここが大切 文章表現のルール』p.13（下線などは筆者による））を用い、下線部が主節で、括弧内が従属節であること、そして「は」「が」の使い分けを確認している。その際、筆者は、違う語順の場合もあること（「（日本人が思っているほど）日本は 狭い国ではない」）を提示しているのだが、学習者たちの反応を見ると、一部の学習者たちは、語順が違う可能性があることにあまり慣れていないように見受けられることが多い。

上記「3.4.1」に「中国語／英語と違う」という記述があったことを書いたが、いわゆる固定語順である中国語や英語と違って、日本語は自由語順であり、助詞があるゆえに、基本的な意味は変えずに、語順を比較的自由に変えることができるという性質がある。

語順で意味が決まる固定語順を母語とする学習者の場合、筆者は中級あたりぐらいから、基本語順だけではなく、語順を変えた「かき混ぜ文」も適宜提示したり注意喚起をしたりすることを通して、より助詞に注意して読むことに慣れてもらうことが大切なのではないかと考えている。この助詞の大切さは、「3.4.1」に出てきている「受け身・使役の対象」「主語と述語のつながり」「主節・従属節」「修飾語・被修飾語」「省略」といった点について読み解く場合にも共通している。学習者自身からも注意していることとして「助詞に気を付けて読んでいます」という記述があったことも興味深い点だと言えるだろう。

#### 3.4.4 関連事例や今後の注意点③：全体の構造を把握するための工夫

上記「3.4.2」で簡単・局所的なものから理解を確実にしていく重要性に言及したが、学習者は長くて複雑な文を目にしたとき、「3.4.3」に書いたように、

基本語順では書かれていないかもしれない点を考慮した上で、まず助詞に注意し、受け身や使役の対象、省略されている部分などを見抜き、また長い名詞修飾節などを飛び越えて、主述関係を理解するといった一つ一つの注意点をクリアして、ようやく文全体の構造が把握できることになる。

このような注意点をわかりやすく把握するため、文を色分けしたり、下線やハイライトを入れて強調したりするなどして視覚的に構造が見えるようにすることや、文章によっては図式化することが文章全体の理解の一助になることが予想される。「3.4.1」で書いたように「主語をハイライトして見失わないようにしている」というストラテジーを用いている学習者もいることは大変興味深いことであると言える。

「読み」を目的としたものではないが、大島・生天目・今村・小畑・安高（2025）は、学術論文に出てくる「構成要素ごとに色を塗って展開を把握する『構成要素色塗りメソッド』」を考案しているが、上級者が困難を感じるような長くて複雑な文章の読解においても、視覚的効果を用いることが文章全体の理解を助けることは想像に難くない。

### 3.5 困難点④:文章全体に関して

「指示代名詞が指すものがわからなくなる」という記述があったが、これも興味深い。なぜなら、上記「2.1」で述べた「主張理解のための読み」で誤答が多かった設問は、まさに、文章の最後に主張をまとめた一文にある「『それ』は何を指すか」という問いであり、やはり「指示代名詞が指すもの」は授業活動において確認するといったポイントであると言えるだろう。

また「暗示的な意味、比喻、歌詞」といった記述もあり、これは一種の表現技法とも言えるが、文章の連なり、または全体の中から、辞書的・表面的な字義ではなく、その文脈の中で作者が意図している深い意味を読み取るという概念的・抽象的な言語作用を理解することを意味している。これは、もちろん母語話者にとっても難易度が高いものであるため、授業活動においてやはり注意すべきポイントであることは言うまでもないだろう。

### 3.6 困難点⑤:背景的知识

「故事、史実、歴史、文化が背景にある表現・固有名詞」といった内容の記述があった。これについて、筆者がこういった知識の説明が必要であると実感した経験を紹介したい。それは「3.4.2」でも言及した自分の好きな詩歌を取り上げてクラスメートに説明するという活動をしていた時のことである。ちょうどコロナ禍の時分で、ある学生が「サラッと一句！わたしの川柳コンクール（旧名称:「第一生命サラリーマン川柳コンクール」）」第35回（2022年発表）に入賞した「ウイルスも 上司の指示も 変異する」について紹介していた時のことである。ウイルスが「変異する」ことによって世の中が大きく振り回されている中、上司の指示の変更もウイルスと同列に考えて「変異する」とユーモラスに捉える視点が面白いという内容であった。その際、この句はその年の第二位に選ばれていたという補足説明があり、一位は「8時だよ!! 昔は集合 今閉店」であるこ

とも紹介された。その際、発表者本人のみならず、その発表を聞いていたクラスメートからも「一位の句も確かにコロナ禍の今を表していて面白いが、『変異する』という大げさな言葉を上司の指示に対して使っている二位の句のほうがもっと面白いのではないかと感じた」という感想が多く聞かれ、一位の句のおもしろさについて筆者の意見を求めてきたことがある。それに対して「8 時だよ!!」という掛け声の背景にある知識（1969 年から 1985 にかけて放送され高視聴率を誇ったテレビ番組がある）を紹介したのだが、言葉は字面の意味だけではなく、その言葉を使う人たちの間で共有されている、背後に隠れている意味合いもあることを実感した体験になったのではないかと思われる。

#### 4. まとめと今後の課題

今回、授業活動の中で学習者に書いてもらった「読み」の困難点についてのデータを紹介したが、その内容が他の論文で指摘されている誤読の原因とも重なるものが多かったり、また筆者のこれまでの授業活動で観察・経験したこととも符合するものがあつたりして、示唆に富むと感じられるものであった。

本稿で言及した困難点の中には、中国語話者に限らないものもあると思われる。また「読み」だけではなく、「書く」や「話す」などの他のスキルともつながっているところもあると思われ、他のスキル活動においての困難点にも目を向けてみると、面白い結果が得られるかもしれないと感じている。

今後は、データの取り方を工夫し、選択肢を取り入れたりして、焦点を絞る形で記述してもらうことも考えている。それによって、より広範囲であつたり、また深堀したりする形でこのトピックについて明らかになることが出てくるかもしれないと考えている。

また、今回はコーディングやテキストマイニングを施さなかったが、それらによって、より客観性の伴った質的深さのある分析結果が現れてくる可能性もある。

最後に、本稿は筆者のアクション・リサーチ的な取り組みに基づいているため、本稿を通して得られた気づきや知見を今後の授業改善につなげることは言うまでもない。学習者の目線に立ち、困難と感じる点を理解し、寄り添う形で授業活動にさらなる工夫を加えていければと考えている。

#### 参考文献

- あいみょん (2018) 「マリーゴールド」ワーナーミュージック・ジャパン  
石黒圭・筒井千絵 (2009) 『留学生のためのここが大切 文章表現のルール』スリーエーネットワーク  
大島弥生・生天目知美・今村圭介・小畑 美奈恵・安高紀子 (2025) 「学術論文読解の導入支援のための『構成要素色塗りメソッド』を用いたワークショップの実践と課題」専門日本語教育学会研究討論会誌 第 27 回 31-32  
岡まゆみ (1998) 『中・上級者のための速読の日本語』ジャパントイムズ  
スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語 初級 I 本冊』スリーエーネットワーク

- 友松悦子・和栗雅子（2004）『短期集中 初級日本語文法総まとめポイント 20』  
スリーエーネットワーク
- 野田尚史・花田敦子・藤原未雪（2017）「上級日本語学習者は学術論文をどの  
ように読み誤るか―中国語を母語とする大学院生の調査から―」『日本語教  
育学会』167号, 15-30
- 野田尚史・桑原陽子（2022）『日本語コミュニケーションのための読解教材の作  
成』ひつじ書房
- 福岡理恵子・清水知子・初鹿野阿れ・中村則子・田代ひとみ（2011）『新完全マ  
スター読解 日本語能力試験 N1』スリーエーネットワーク